

一、次の各問いに答えなさい。

問一 次の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① 食事にシヨウタイする。
- ② キミが悪い怪談話。
- ③ 手のひらをカエす。
- ④ 悠々ジテキの生活を送る。
- ⑤ コンをつめて勉強した。

問二 次の——線部のカタカナと同じ漢字を用いる熟語を、それぞれ後のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

- ① 直セツ会って、話をする。
ア 接続 イ 説明 ウ 骨折 エ 節理
- ② あなたの意見に賛セイする。
ア 帰省 イ 盛大 ウ 整列 エ 成果
- ③ 美しさのサイたるものは音楽である。
ア 国際 イ 才能 ウ 最高 エ 祭日

- ④ 君がユ断したのが失敗の原因だ。
ア 輸入 イ 油田 ウ 愉快 エ 由縁

- ⑤ メイ案が浮かんだ。
ア 名実 イ 明確 ウ 命令 エ 迷路

問三 次の文の——線部はどこにかかりますか。かかる部分を例にならって答えなさい。(ただし、句読点はふくみません。)

〔例〕 ぼくは 君が いつか 成功すると 思う。

〔答〕 成功すると

- ① ぼくは つくえの 上の 汚れを ふいた。
- ② わたしは 母の 編んだ セーターを 着ています。
- ③ 丘の 上に ある あの 立派な 建物は 友達の 家だ。
- ④ ごらん、 あそこで カシオペア座が 光るのを。
- ⑤ 天気予報によれば、 明日の 午後には 雨が 降るらしい。

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

日本人にとって、^①外国語の魅力がだんだん減ってきたと言われる。^{※1}巷にカタカナ、横文字がはらんしているのに、と不審に思うかもしれないが、それだからこそ、おもしろさがはげ出したのかもしれない。

もともと、都会の人と田舎の人とを比べると、田舎にいる人間の方が外国語にあこがれる気持がつよい。明治以降の語学者を見ても、多くは地方出身者であった。ときに、東京出身の洋学者もないではないが、おくられている。地方の若ものの方が、ヨーロッパへのあこがれはいつそうつよいようだ。

戦後、生活が洋風化した。ことに近年は、自由に海外旅行ができるようになった。行ってみると、夢に描いていた青い鳥は飛んでいない。うつすらと幻滅を感じながら帰ってくるという次第になる。知ることはかならずしも幸福とは限らない。

外国語にしても、あまりよくわからなかった時代には、何となく興味を覚えたのに、うんざりするほど目につくようになると、興味索然としてくる。

同じようなことは、人間と人間との間にも見られる。遠くはなれて眺めていたときにはすばらしく思われた人が、すこし親しくなってみると、さっぱりおもしろくない。

I、うとましくすら感じられる。恋愛などがそういう経緯をたどって破局を迎えることもすくない。

こういう具体的経験をそのままにしておいたのでは、ほかへの応用がきかない。^②整理して、公式化しておくとは生活の知恵になる。遠くにいたときりっぱに見えた人が親しくしてみると、いっこうに魅力のないように感じられるのは、^{※3}従僕に英雄なし^{※2}ということわざにまとめておくと、これに類することが、いくらでもあるのに気づく。

はじめの外国語の凋落は、よくわからずに心をひかれていたのが、白日のもとに出てしまつて色あせて見えるという現象である。これをさらに純化させると、ことわざの「夜目、遠目、笠の内」になる。これは女性が美しく見える状況を言つたものだが、一般に、距離がやや大きすぎて、さだかに見えないものに、われわれは心をひかれる。あまり近くなると、ハナにつく。ハナについたものが、美しくおもしろく感じられるわけではない。

サラリーマンが仕事がおもしろくない。上役に叱られた、というようなことがあると、ほかの人のしていることがよさそうに思われる。自分のやっている仕事がいちばんつまらなそうだ。思い切つてやめてしまえ、となる。商売変えたところで、同じ人間がするのである。急に万事うまく行く道理がない。またおもしろくなる。またおもしろくなる。②、^④またも、ほかの人の職業がよさそうに見える。こういう人はいつまでもたつても腰が落ちつかない。

学生でありながら、早くも、同じ傾向を示すのがある。英文科へ入つて来て、しばらくすると、退屈きわまりない。心理学科はそれに引きかえ、実験があつて、いかにも学問らしい。あれへ転向しよう、というので転科する。二年もすると、心理にもあきてくる。もつと刺激のある勉強がしたいといつて、さらに、物理学科へ入りなおす。こういう人間は結局、何もできないで終る。

③、^④こういう例は世の中にごろごろしている。それなのに、相変らず、同じことをくりかえす人があとからあとあらわれる。めいめいの人にはほかの人の経験が情報として整理されていないからである。整理されていないわけではない。ちゃんと、^④ことわざという高度の定理化が行なわれているのに、それを知らないでいるためである。

たえず職業を変えるのは、賢明でない。そのことは、古くからはつきりしていた。A、^④「^④」というのがそれである。イギリスには、これを「ころがる石はコケ（お金）をつけない」と表現した。とにかく、じつと我まんが必要だ、ということである。

なぜ、英文科の学生に心理学がおもしろそうに見えるのか。人間性がそういうようになっていくからである。あすは試験という前の晩、勉強をしようとしていると、ふだんは目もくれない難解な哲学書などを、何となくのぞいて見たくなる。ちよつとのつもりが、なかなかやめられなくて、ついつい読みふけて、勉強の計画を狂わせる——このことはすでに書いた。

こういう経験は、隣りの花は赤（美し）い、^④ということわざのもとに分類、整理しておく、ずいぶん思考の節約になる。遠くから見ると、隣の花だから、ことさらに赤く見える。そこへ行つてよくみると、何と虫だらけであるという場合だつてないとは言えまい。目の前の花は、実際よりも色あせて見える。

商売をする人、^{※5}投機をする人は、ものの売り買いのタイミングを見きわめるのに身の細る思いをする。もうよからうと思つて、売買すると、早すぎる。それにこりて、こんどは、満を持していると、好機を逸してしまう。もつと早く決断すればよかったと後悔する。商売の人は、たえずこういう失敗を経験している。そのひとつひとつは複雑で、それぞれ事情は違う。ただ、タイミングのとりかたがいかに難し

いか、という点と、自分の判断が絶対的でないというところを法則化すると、モウはマダなり、マダはモウなり」ということわざが生れる。

学校教育では、どういふものか、ことわざをバカにする。ことわざを使うと、インテリではないように思われることもある。

Ⅲ

実生活で苦勞している人たちは、ことわざについての関心が大きい。現実の理解、判断の基準として有益だからである。

ものを考えるに当たっても、ことわざを援用すると、簡単に処理できる問題もすくなくない。

現実には、具体的問題である。これはひとつひとつ、C 化、記号化したのがことわざである。Aというサラリーマンの腰が落ちつかず、つぎつぎ勤めを変えている。これだけでは、サラリーマン一般、さらには、人間というものにそういう習性があつて、その害が古くから認められていることに思い至るいたのは無理だろう。これに「ころがる石はコケをつけない」というパターンをかぶせると、サラリーマンAも人間の習性によって行動していることがわかる。別に珍しくもない、となる。

具体例を抽象化し、さらに、これを定型化したのが、ことわざの世界である。しょ民の知恵である。古くから、どこの国においても、お

ちゅうしように

⑤

びただしい数のことわざがあるのは、文字を用いない時代から、人間の思考の整理法は進んでいたことを物語る。

個人の考えをまとめ、整理するに当たっても、人類が歴史の上で行なってきた、ことわざの創出（さうしゅつ）が参考になる。個々の経験、考えたことをそのままの形で記録、保存しようとすれば、煩雑（はんざつ）にたえられない。片端から消えてしまい、後に残らない。片端から消えてしまい、後に残らない。

一般化して、なるべく、普遍性ふへんせいの高い形にまとめておくと、同類どうるいのものが、あとあとその形と照応しょうおうし、その形式を強化してくれる。

IV、自分だけの「ことわざ」のようなものをこしらえて、それによつて、自己の経験と知見、思考を統率させるのである。そうして生れる「ことわざ」が相互に関連性をもつとき、その人の思考は体系をつくる方向に進む。

そのためには、関心、興味の核かくをはつきりさせる。その核ぎょうしゆつに凝集する具体的事象、経験を一般的命題※7しやうかへ昇華して、自分だけのことわざの世界をつくりあげる。このようにすれば、本を読まない人間でも、思考の体系をつくり上げることは充分に可能である。

〔外山滋比古〕『思考の整理学』より
問題作成のために本文を一部変更・省略したところがあります。

- ※1 「巷」……………世間。
- ※2 「索然」……………おもむきがなくて、つまらないさま。
- ※3 「従僕」……………召使の男。
- ※4 「凋落」……………おちぶれること。
- ※5 「投機」……………市場の価格を予想して利益をねらう取引。
- ※6 「煩雜」……………わずらわしく、ごたごたすること。
- ※7 「昇華」……………物事がさらに高次の状態へ一段と高められること。

問
線部①「外国語の魅力がだんだん減ってきた」とありますが、その理由を説明した次の文の□にあてはまることばをそれぞれ文中からぬき出しなさい。

一般に我々は ア

(六字) いるものに心をひかれるのに、生活が イ

(三字) し、

ウ

(四字) も可能になったため、外国語が我々の周囲に

工

(四字) するようになったから。

問二

I
Ⅳ

にあてはまることを、次のア～オの中から選んで、それぞれ記号で答えなさい。

ア
しかし
イ
すると
ウ
むしろ
エ
ただし
オ
つまり

問三 — 線部②「整理して、公式化しておく」と生活の知恵になる」とありますが、このような「生活の知恵」を筆者は何と言いかえていますか。文中から九字でぬき出さない。

問四 — 線部③「こういう例」を説明した次の文の にあてはまることばを、それぞれ文中からぬき出さない。

^ア (三字) の仕事や勉強に ^イ (三字) で、職業や学問を ^ウ (四字) と変える例。

問五 — 線部④「ことわざという高度の定理化」とありますが、これはどのように行われますか。それを説明した次の文の にあてはまるように、文中から十九字でぬき出さない。

(十九字) して行われる。

問六 A にあてはまることわざとして最も適当なものを、次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 馬の耳に念仏
- イ 魚心あれば水心
- ウ 下手の横好き
- エ 石の上にも三年

問七 B C にあてはまることばの組み合わせとして最も適当なものを、次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

- | | | | | |
|---|---|-----|---|----|
| ア | B | 具体的 | C | 抽象 |
| イ | B | 特殊 | C | 一般 |
| ウ | B | 抽象的 | C | 具体 |
| エ | B | 複雑 | C | 普遍 |

問八 — 線部⑤「古くから、どこの国においても、おびただしい数のことわざがある」とありますが、その理由を説明した次の文の にあてはまることばを、それぞれ文中からぬき出さない。

ことわざは、現実をどのように ^ア (二字) して、判断するかの ^イ (二字) となるので人々にとって

非常に有効なものであったため、一部の人の知恵でなく、いつの時代、どの地域でも存在する ^ウ (三字) の知恵となっていたから。

問九 ― 線部⑥「〴ことわざ」が相互に関連性をもつとき、その人の思考は体系をつくる方向に進む」とありますが、これはどういうことですか。その説明として最も適当なものを、次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 複数の人間が似たような経験をする事で得られた〴ことわざが、自分の経験と重なり合うことで、自身の考えが高次元なものになっていくということ。
- イ 自らの体験から学び取ったいくつかの生活の知恵が、他のパターンと複合することで、その人のものの考え方がまとまりをもつたものになるということ。
- ウ 自分の経験から得ることができた〴ことわざが、他人のもっているパターンと組み合わせたり、当人の考えにまとまりが出てくるということ。
- エ 自分の経験は具体的で複雑であるため、それらを整理し、形式化させることで得られた知恵が、自分の考えをまとめていくということ。

(空白ページ)

三、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

主人公の「白」は、「お嬢さん」と「坊ちゃん」の飼いだて、名前のとおりまっ白な体をしていました。ある春の昼過ぎ、「白」が道を歩いていると、「大殺し」が隣の「黒」を殺そうとしていました。「白」はおそれるあまり、「黒」を助けることなく一目散に逃げてしまいました。「白」は何とか家にたどり着き、「お嬢さん」と「坊ちゃん」にかけ寄りました。しかし「お嬢さん」と「坊ちゃん」は「どこの犬？」と不思議に思い、たたき出そうとします。なんと、いつの間にか「白」の体がまっ黒になっていたのです。

次の場面は、家を追い出された「白」があてもなく町を歩いているところです。

お嬢さんや坊ちゃんに逐い出された白は東京中をうろろ歩きしました。しかし何処へどうしても、忘れることの出来ないのはまっ黒になった姿のことです。白は客の顔を映している理髪店の鏡を恐れました。雨上りの空を映している往来の水たまりを恐れました。往来の若葉を映している飾窓の硝子を恐れました。いや、カフェのテーブルに黒ビールの湛えているコップさえ、——けれどもそれが何になりました？あの自動車を御覧なさい。ええ、あの公園の外にとまった、大きい黒塗りの自動車です。漆を光らせた自動車の車体は今こちらへ歩いて来る白の姿を映しました。——はつきりと、鏡のように。白の姿を映すものはあの客待ちの自動車のように、到るところにある訣なのです。もしあれを見たとすれば、どんなに白は恐れるでしょう。それ、白の顔を御覧なさい。白は苦しうに唸ったと思うと、忽ち公園の中へ駆けこみました。

公園の中には鈴懸の若葉にかすかな風が渡っています。白は頭を垂れたなり、木木の間を歩いて行きました。此処には幸い池の外には、姿を映すものも見当りません。物音は唯白薔薇に群れる蜂の音が聞えるばかりです。白は平和な公園の空気に、少時は醜い黒犬になった日ごろの悲しさも忘れていました。

しかしそう云う幸福さえ五分と続いたかどうか分かりません。白は唯夢のように、ベンチの並んでいる路ばたへ出ました。するとその路の曲り角の向うにけたたましい犬の声が起ったのです。

「きゃん。きゃん。助けてくれえ！ きゃあん！ きゃあん。助けてくれえ！」

白は思わず身震いをしました。この声は白の心の中へ、あの恐ろしい黒の最後をもう一度はつきり浮ばせたのです。白は目をつぶったまま、元来た方へ逃げ出そうとしました。けれどもそれは言葉通り、ほんの一瞬の間のことです。白は凄じい唸り声を洩らすと、きりりと又振り返りました。

「きゃあん。きゃあん。助けてくれえ！ きゃあん。きゃあん。助けてくれえ！」

この声は又白の耳にはこう云う言葉にも聞えるのです。

「きゃあん。きゃあん。臆病ものになるな！ きゃあん。臆病ものになるな！」

白は頭を低めるが早い、声のする方へ駆け出しました。

けれども其処へ来て見ると、白の目の前へ現れたのは犬殺しなどではありません。唯学校の帰りらしい、洋服を着た子供が二三人、頸のまわりへ縄をつけた茶色の子犬を引きずりながら、何か面白い騒いでいるのです。子犬は一生懸命に引きずられまいとがきもがき、「助けてくれえ」と繰り返していました。しかし子供たちはそんな声に耳を借すけしきもありません。唯笑ったり、怒鳴ったり、或は又子犬の腹を靴で蹴ったりするばかりです。

白は少しもためらわずに、子供たちを目がけて吠えかかりました。不意を打たれた子供たちは驚いたの驚かないのではありません。又実際白の容子は火のように燃えた眼の色と云い、刃物のようにむき出した牙の列と云い、今にも噛みつくかと思う位、恐ろしいけんまくを見せているのです。子供たちは四方へ逃げ散りました。中には余り狼狽したはずみに、路ばたの花壇へ飛びこんだのがあります。白は二三間追いかけた後、くると子犬を振り返ると、叱るようにこう声をかけました。

「さあ、おれと一しよに来い。お前の家まで送ってやるから」

白は元来た木木の間へ、まっしぐらに又駆けこみました。茶色の子犬も嬉しそうに、ベンチをくぐり、薔薇を蹴散らし、白に負けまいと走って来ます。まだ頸にぶら下った、長い縄をひきずりながら。

二三時間たった後、白は貧しいカフェの前に茶色の子犬と佇んでいました。昼も薄暗いカフェの中にはもう赤あかと電燈がとり、音の

※² かつれた蓄音機は浪花節か何かやっているようです。子犬は得意そうに尾を振りながら、こう白へ話しかけました。

「僕は此処に住んでいるのです、この大正軒と云うカフェの中に。——おじさんは何処に住んでいるのです？」

「おじさんかい？ おじさんは——ずっと遠い町にいる」

白は寂しそうにため息をしました。

④ 「じゃもうおじさんは家へ帰ろう」

「まあお待ちなさい。おじさんの御主人はやかましいのですか？」

「御主人？ なぜ又そんなことを尋ねるのだい？」

「もし御主人がやかましくなければ、今夜は此処に泊って行つて下さい。それから僕のお母さんにも命拾いの御礼を云わせて下さい。僕の家には牛乳だの、カレエ・ライスだの、ピフテキだの、いろいろな御馳走があるのです」

「ありがとう。ありがとう。だがおじさんは用があるから、御馳走になるのはこの次にしよう。——じゃお前のお母さんによろしく」

白はちよいと空を見てから、静かに敷石の上を歩き出しました。空にはカフェの屋根のはずれに、三日月もそろそろ光り出しています。

「おじさん。おじさん。おじさんと云えば——」

子犬は悲しそうに鼻を鳴らしました。

「じゃ名前だけ聞かして下さい。僕の名前はナポレオンと云うのです。ナポちゃんだのナポ公だのとも云われますけれども。——おじさんの名前は何と云うのです？」

「おじさんの名前は白と云うのだよ」

「白——ですか？ 白と云うのは不思議ですね。おじさんは何処も黒いじゃありませんか？」

白は胸が一ぱいになりました。

⑤ 「それでも白と云うのだよ」

「じゃ白のおじさんと云いましょう。白のおじさん。是非又近い内に一度来て下さい」

「じゃナポ公、さよなら——」

「御機嫌好う、白のおじさん！ さようなら、さようなら！」

⑥ その後の白はどうなったか？——それは一話さずとも、いろいろの新聞に伝えられています。大かたどなたも御存じでしょう。度々危い人命を救った、勇ましい一匹の黒犬のあるのを。又一時『義犬』と云う活動写真の流行したことを。あの黒犬こそ白だったのです。

或秋の真夜中です。体も心も疲れ切った白は主人の家へ帰って来ました。勿論お嬢さんや坊ちゃんはどうに床へはいつています。いや、今は誰一人起きているものもありますまい。ひっそりした裏庭の芝生の上にも、唯高い棕櫚の木の下に白い月が一輪浮んでいるだけです。白は昔の犬小屋の前に、露に濡れた体を休めました。それから寂しい月を相手に、こういう独語を始めました。

「お月様！ お月様！ わたしは黒君を見殺しにしました。わたしの体のまっ黒になったのも、大かたそのせいかと思っています。しかしわたしはお嬢さんや坊ちゃんにお別れ申してから、あらゆる危険と戦って来ました。それは一つには何かの拍子に煤よりも黒い体を見ると、臆病を恥じる気が起ったからです。けれどもしまいに黒いのがいやさに、——この黒いわたしを殺したさに、或は火の中へ飛びこんだり、或は又狼と戦ったりしました。が、不思議にもわたしの命はどんな強敵にも奪われません。死もわたしの顔を見ると、何処かへ逃げ去ってしまうのです。わたしはどうとう苦しさの余り、自殺をしようと決心しました。唯自殺をするにつけても、唯一目会いたいの可愛がって下さった御主人です。勿論お嬢さんや坊ちゃんはあしたにもわたしの姿を見ると、きっと又野良犬と思うでしょう。ことによれば坊ちゃんのバットに打ち殺されてしまうかも知れません。しかしそれでも本望です。お月様！ お月様！ わたしは御主人の顔を見る外に、何も願うことはありません。その為に今夜ははるばるともう一度此処へ帰って来ました。どうか夜の明け次第、お嬢さんや坊ちゃんに会わせて下さい」

白は独語を云い終ると、芝生に顎をさしのべたなり、何時かぐっすり寝入ってしまいました。

「驚いたわねえ、春夫さん」

「どうしたんだろう？ 姉さん」

白は小さい主人の声に、はっと目を開きました。見ればお嬢さんや坊ちゃんは犬小屋の前に佇んだまま、不思議そうに顔を見合せています。白は一度挙げた目を又芝生の上へ伏せてしまいました。お嬢さんや坊ちゃんは白が真っ黒に変った時にも、やはり今のようには驚いたものです。あの時の悲しさを考えると、——白は今では帰って来たことを後悔する気さえ起りました。するとその途端です。坊ちゃんは突然飛び上ると、大声にこう叫びました。

「お父さん！ お母さん！ 白が又帰って来ましたよ！」

白が！ 白は思わず飛び起きました。すると逃げるとでも思ったのでしょうか。お嬢さんは両手を延ばしながら、しっかりと白の頸を押えしました。同時に白はお嬢さんの目へ、じっと彼の目を移しました。お嬢さんの目には黒い瞳にありありと犬小屋が映っています。高い棕櫚の木のかげになったクリーム色の犬小屋が、——そんなことは当然に違いありません。しかしその犬小屋の前には米粒程の小ささに、白い犬が一匹坐っているのです。明らかに、ほっそりと。——白は唯恍惚とこの犬の姿に見入りました。

⑧「あら、白は泣いているわよ」

お嬢さんは白を抱きしめたまま、坊ちゃんの顔を見上げました。坊ちゃんは——御覧なさい、坊ちゃんの威張っているのを！

「へっ、姉さんだって泣いている癖に！」

(芥川龍之介『白』より 問題作成のために本文を一部変更・省略したところがあります。)

※1 「カフェ」……………主として西洋のお酒などを出した飲食店。

※2 「蓄音機」……………レコード盤から音を再生させる装置。

※3 「浪花節」……………三味線に合わせて、うたい語る演芸。

※4 「恍惚と」……………うつとりするさま。

問一——線部①「鏡を恐れました」とありますが、それはなぜですか。文中のことはを用いて、二十五字以内で答えなさい。

問二——線部②「けれどもそれが何になりましたか？」とありますが、そう言えるのはなぜですか。文中のことはを用いて、二十字以内で答えなさい。

問三——線部③「身震いをしました」とありますが、このときの「白」の気持ちとして最も適當なものを、次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

ア 勇かん イ 喜び ウ 気弱 エ 不幸

問四——線部a～cの文中における意味として最も適當なものを、次のア～エの中から選んで、それぞれ記号で答えなさい。

a 「ためらわず」……………

ア おびえないで
イ 気持ちをおさえず
ウ 張り切って
エ 迷うことなく

b 「けんまく」……………

ア 怒った顔
イ するどいキバ
ウ 怒鳴り声
エ 大きなツメ

c 「狼狽した」……

- ア 驚いた
イ あわてた
ウ 騒いだ
エ 走り出した

問五

——線部④「『じゃもうおじさんは家へ帰ろう』とありますが、このときの「白」の気持ちとして最も適当なものを、次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

ア 家には帰りたいものの、余りに遠くに来てしまい帰れないという悲しさ。

イ すでに子犬を子供たちから救ったのだから、元の体にもどれるだろうという期待。

ウ 家には帰りたいが、もうそこは帰る場所ではなくなってしまったという寂しさ。

エ 子犬とちがつて、自分には帰るべき家がないということへの怒り。

問六

——線部⑤「『それでも白と云うのだよ』とありますが、このときの「白」の気持ちを説明した次の文の□にあてはまることばを、それぞれ文中からぬき出さない。

御主人がくれた□^ア□□(二字)に愛着をもちつつも、黒君を□□^イ□□(三字)にしたために体が□□^ウ□□(三字)になって

しまいやりきれない気持ち。

問七

——線部⑥「度々危い人命を救った」とありますが、「白」はなぜ「人命を救った」のですか。文中のことばを用いて、十一字以上十五字以内で二つ答えなさい。

問八

——線部⑦「目を又芝生の上へ伏せてしまいました」とありますが、このときの「白」の気持ちとして最も適当なものを、次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

ア 体が白くもどつたことを不思議に思う「お嬢さん」と「坊ちゃん」への失望と、自分を認識しないような「お嬢さん」や「坊ちゃん」には会いたくなかったという後悔。

イ いなくなったと認識されていた自分が帰ってきたのに、それを不思議としてしか考えない「お嬢さん」や「坊ちゃん」への失望と、それならば帰って来ない方が良かったという後悔。

ウ なぜ自分が白くもどれたかを「お嬢さん」と「坊ちゃん」は理解できないだろうというあきらめと、自分もどってきて「お嬢さん」と「坊ちゃん」を混乱させるべきではなかったという後悔。

エ やはり黒い自分を「白」としては認識しないだろうというあきらめと、また「お嬢さん」や「坊ちゃん」に驚かれてしまうなら帰って来ない方が良かったという後悔。

——線部⑧「『あら、白は泣いているわよ』とありますが、このときの「白」の気持ちとして適当なものを、次のア～カの中から二つ選んで、記号で答えなさい。

ア「お嬢さん」たちに愛されていた白い体にもどれたので、もう二度と黒い体に悩まされることはないという安心した気持ち。

イ自分の弱い心から体が黒くなってしまったようだが、「お嬢さん」たちに愛されていた元の白い体にもどれたことを喜ぶ気持ち。

ウなぜ黒い体になってしまったかはまったく分からないが、とりあえず白い体にもどれて良かったと安心した気持ち。

エ前日の夜に願っていた、「お嬢さん」や「坊ちゃん」に一目会いたいという願いがかない、もう離れ離れにならないのだと安心する気持ち。

オ「お嬢さん」も「坊ちゃん」も「白」が白い体にもどったと喜んで、自分のことを抱きしめるくらい喜んでくれて、「白」自身も喜ぶ気持ち。

カ「お嬢さん」や「坊ちゃん」に会えただけでなく、二人が自分を「白」だと理解し、もどってきたことを喜んでくれていてうれしいという気持ち。

座席番号
受験番号
氏名
評点

問	
④	①
⑤	②
	③

す

問二	
④	①
⑤	②
	③

問 三	
④	①
⑤	②
	③

問	
ウ	ア
エ	
	イ

I
II
III
IV

[illegible]

問四	ア				
	イ				
	ウ				

[illegible]

問六	
問七	
問八	ア
	イ
	ウ

問九

[illegible][illegible]

問三	
問四	
a	
b	
c	
問五	

問六	
ア	
イ	
ウ	

[illegible]

問八	
問九	